

北野収著

『南部メキシコの内発的発展とNGO——グローバル公共空間における学び・組織化・対抗運動——』

勁草書房 2008年 xiii+355ページ

山本純一

I

現在の世界は100年に一度の経済危機にあるといわれている。マルクス経済学的に言えば恐慌、すなわち資本主義の危機である。このような危機に対する処方箋としては、戦争待望や政府紙幣の発行といった極論がある一方、地域（ローカル）の力に活路を求める「地道」な考え、運動がある。

たとえば、近代的開発を告発したヘレナ・ノーバーク・ホッジは、「グローバル経済システムの破壊性や現在の経済危機に対して、私たちは何ができるのでしょうか」という質問に対して、次のように答えている。「まずは学ぶことです。私たちの生活の基盤をなす経済へのリテラシーを高め、今のままでは自滅しかぬことに皆が気づくべきです。そして打撃を小さくし環境や健康を守るためには、反グローバル化の運動から一歩進めて『ローカリゼーション』に向かうべきです。村落や地方、国などさまざまなレベルでの脱中心化・分散化を進めるのです」（『オルタ』アジア太平洋資料センター 2009年1/2月号 38ページ）。

日本でも経済評論家の内橋克人は、1990年代末から、市場原理を重視した構造改革に対抗する概念として「共生経済」、具体的には、F（食糧）・E（エネルギー）・C（ケア）の自給圏（権）を提唱してきた〔内橋 1998, 328〕。同様のこと（地域の自立）は、経済ナショナリストを自認する本山美彦も萱野稔人との対談で語っている〔本山・萱野 2008, 164

-166〕。

しかしながら、そのようなローカルな活動、運動の実態を、実証的かつ理論的に精緻化する知的営為は緒についたばかりで、評者自身の現在の関心もこの領域にあるが、まだ萌芽的な研究にとどまっている〔山本 2005；2006〕。この意味において、「NGO・市民社会の活動の実体論と、その背後にある伝統・価値・哲学の媒介者としての知識人の役割に関する論考（解釈論）を、『接合』することにより、『運動』としての内発的発展論を再評価し、社会理論として精緻化し（中略）同時に、グローバル経済下における経済的・社会的弱者である南部メキシコの小農・先住民と現地市民社会のネットワーク化による『新しい公共空間』を見出そうという試みでもある」（iiページ）本書は、まさに時宜を得た好企画であり、後述するように、多くの示唆と知的刺激に富む労作である。

それではなぜ南部メキシコなのか。ラテンアメリカは新自由主義の実験場の先駆として知られているが<sup>〔註1〕</sup>、「メキシコは1980年代の構造調整に始まり、北米自由貿易協定（NAFTA）への参加、南部地域におけるプエブラ・パナマ開発計画（PPP）の開始等、グローバル化の進展による国民国家の政治的・地理的枠組みを超えた経済社会空間のドラスタチックな再編成が進行している端的な例といえよう。そして、北米大陸内における南北問題とメキシコ国内におけるそれという二重の意味での格差の影響を受けているのが、オアハカ、チアパスなどの先住民人口が高い南部の貧困州（iページ）なのである。

以上の問題意識と研究背景・目的に基づく本書の章立ては、次のとおりである。

序 章 本書の射程と南部メキシコという文脈

第I部 個々人と時代の対話・交渉

第1章 脱プロ知識人とポスト開発思想

第2章 女性活動家の遍歴と政治空間

第3章 フェアトレードの父の思想と哲学

第4章 農民・女性・青年の「学び」から

第5章 知識人の対話から実践へ

第II部 ローカルNGOと市民社会の諸相

第6章 迫られる変化と運動の動機

第7章 ローカルNGOと市民社会,そして政府

第8章 グローバル化への反応と矛盾

終章 内発的発展・知識人・NGO

補章 複眼的なりアリティの捉え方に関する試論

以下、次節で各章の概要をできる限り著者の言葉を引いて紹介し、最終節で評者のコメント、今後の課題を述べる。なお、著者の基本的な問題関心は、地域研究者のそれではなく、さまざまな開発実践とその背後にある（知識人を介した）思想的意味の考察にあるが、評者のコメントは、あくまで地域研究者の視点から行うもので、課題についても、著者のみならず、（評者を含む）南部メキシコを研究対象とする地域研究者が共有すべきものと考えている。

## II

序章は、内発的発展（論）に対する著者の視座、本書の射程・構成、キーワード、全体を鳥瞰する分析的視点について敷衍し、前述したように、なぜメキシコなのか、オアハカなのか、を論ずる。ここで重要なのは、分析の前提として、内発的発展論には社会運動の側面があることを確認したのち、ポスト（脱）開発志向の社会運動を「社会運動としての内発的発展」の事例と捉えることである。つまり、内発的発展論とポスト開発論には本質的な価値・思想面および実践面で共通する部分が多く、南部メキシコの内発的発展運動をポスト開発論に含めていることである。英文の書名で内発的発展をPost-Development Movementとした所以である。また、分析の射程は、マクロの政治経済と末端のコミュニティを仲介する運動体としての人・組織で、コミュニティそのものは対象外である。構成は、個人史(第I部)と実態論(第II部)の2部からなり、終章で両者を横断的に考察し、補章として、社会運動論、知識人論、NGO論の検討を通じて見出されたリアリティの捉え方に関する試論を提示している。

第1章は、日本ではザックス(1996)の論考で知

られるようになったグスタボ・エステバの遍歴を詳細にしたのち、著者との対話におけるエステバの「語り」を手がかりに、その思想を紹介、分析する。ビジネスマン、大学教員、政府高官を経て、25年以上、オアハカで社会変革、先住民運動支援のためのNGO活動に献身している彼の視座は、草の根レベルの人々のそれであり、人々が欲しているのはオートノミー(autonomy)だという。このオートノミーは、単に行政的な意味での自治権を指すのではなく、文化・歴史・環境、そして自分達の尊厳を守る「自由」が何者にも侵されないという概念である。まさに本質的な価値・思想面で内発的発展論と共通する部分があることの証左である。

第2章は、対抗運動が盛んなテワンテベック地峡に生まれ育ったサボテコ系の女性活動家を取り上げる。1968年の学生運動は世界的な潮流で、メキシコも例外ではない。その際、中央政府の弾圧を受けた多くの活動家は地方に散った。メキシコ市で高校生活を送っていた彼女もその一人で、勉学のかたわら地元で政治活動を開始したが、「革命運動」のイデオロギー性に疑問を持ち、地域の実情に即した社会活動に転進する。30余年にわたる彼女の活動は、ゲリラ的な武力闘争から、政党政治、NGOでの活動、工芸品の創作と啓発・教育活動へと大きく変化した。変わらぬ姿勢は住民の自律性を脅かす何かへの対抗、すなわちオートノミーであり、近代化的かつ政治的な開発に対抗するには伝統が不可欠だと考える。

第3章は、フェアトレード認証ラベル(マックス・ハバラー、現FLO)の創設者の一人で、イスモ地域先住民民族共同体組合(UCIRI)の育ての親でもあるオランダ人神父、フランツ・ヴァンデルホフの思想と哲学を考察する。彼の思想の原点は、オウエンなどの古典的協同組合運動ではなく、貧困と戦争というオランダでの原体験、「解放の神学」の影響を受けたチリでの左翼運動とパウロ・フレイレとの出会いなどで、「経験から思想へ」という流れが検証される。彼の思想のなかで最もユニークといえるのは、国家(国民経済)という枠組みを前提として共同の制度化を図るという概念を持たないことで、ヨーロッパのNGOとのフェアトレードを通じた直接的な

提携関係、つまりヒエラルヒーよりもネットワークを重視する考えにある。そして著者は、UCIRIを含む多数の南の経験から、協同組合思想は西欧あるいは先進国の歴史的経験に基づく産物ではなく、より普遍的・全人類的なものであるという仮説に接近することが可能との重要な問題提起を行っている。

第4章では、対抗運動の主体たる普通の人々に対するインタビューを通して社会変革の源泉に迫りつつ、社会運動の文脈における「学び」について考察する。取り上げるのは、第1章で紹介したエステバが設立したフリースクール「地球大学」で学んだ労働者階級出身のサポテコ人青年、同大学に関心を持ったソケ人既婚女性、生活環境改善運動を推進するサポテコ人農民の3人である。これら普通の人々のストーリーをみる限り、生活実践や知識人との交わり、自発的な「学び」を通じて、草の根レベルでの社会変革の担い手へと発展的に変化していく可能性が指摘できる。

第5章は、エステバに多大な影響を与えたイヴァン・イリイチを再評価したのち、エステバの「語り」におけるイリイチとオアハカでの実践活動を検証する。ひとつの結論は、エステバというローカルNGOネットワークのキーパーソンが、イリイチとの対話・交流を通じた「学び」を経て「形成」されたことである。ここで特筆すべきなのは、初めにエステバ自身の経験と学習があり、そこで得られた知見や考え方がイリイチとの出会いによって確かなものとなり、強化・変容した点である。そして、その到達点として、「学び」やネットワーク・交流機能に特化したローカルNGOという「実践」がある。

第6章では、第Ⅱ部で組織化、ネットワーク化がどのように展開したかを検証する前提として、政策・制度論と文化の変容論という2つの全く異なる視点からの問題提起を行う。分析対象は、前者の視点から農家直接支払制度（PROCAMPO）、後者の視点から『女の町フチタン』[ベンホルト＝トムゼン 1996]の今である。PROCAMPO自体については政策・制度論からみて肯定的にも否定的にも評価できるが、著者が問題とするのは、政策・制度論以前・以上に、政府・行政と農村の最貧層に位置する

人々との間の(物理的、心理的、制度的な意味での)「距離」である。この「距離」があるからこそ、グローバル化への対応の解決策を政策のみに求めることができず、これが対抗運動が発芽する「土壌」になることが示唆される。後者の事例では、一般の産業化社会での性別分業（「男は外、女は内」）とは異なる、母系制に基づくサブシステム志向の経済システムの存在が再確認されるが、根強く残るそのような「伝統」でさえ、グローバル化による変容を迫られつつあるという「危うさ」が指摘される。そして、ローカルNGOの組織化、ネットワーク化という現象は、こうした変化と無縁ではない、と次章以降の考察につなげる。

第7章では、第Ⅰ部および前章における問題提起を念頭に、社会開発、人権問題、森林保全などの領域で活動するオアハカのNGOに焦点を当てる。取り上げる事例は、教会系NGO、農村ラジオ局、地元出身の青年によって結成された2つのNGO、行政と草の根を結ぶ中間組織として形成された2つのNGOで、これらのローカルNGOの成立と展開は、(1)政府の制度政策や教会組織などの外部のオーソリティーやパワーとの関係性に規定されてきた、(2)1990年前後の構造調整期以前に萌芽があった、(3)キーパーソンとも呼ぶべき個人の存在があった、と指摘している。

第8章は、州レベルでのコーヒー農民の協同組合運動とメキシコ南部から中米を対象とした国家横断的メガ開発計画（ブエブラ・パナマ開発計画）に対する反対運動を取り上げる。両運動はそれぞれ「構造調整・民営化とコーヒー小農組合」、「巨大開発計画と先住民」という文脈の異なるグローバル化／新自由主義への反応の事例として提示されるが、そこにはオルタナティブな社会変革の可能性だけでなく、現実論的な矛盾も見出すことができる。意識の違いや利害の対立などが存在するこれらの運動は決して一枚岩ではなく、そのネットワークの糸（人材、情報、資金）と結び目（ローカルNGO、住民組織など）は、細く、脆弱だからである。

終章では、第Ⅰ部と第Ⅱ部で記述・分析された1990年代から2006年までのオアハカにおける複数形

の運動の総体としての内発的發展を、ポスト新しい社会運動の実践として定義し、そこで活動するローカルNGOの役割について評価したのち、社会変革のための人的資源として知識人達を位置付ける。しかしながら、著者は彼らのポスト開発思想に共感を覚えながらも、グローバル資本主義や新自由主義への市民社会からの反応として期待を込めて議論が高まりつつあった「もうひとつの世界」論にはナイーブに与しない。9.11同時多発テロ以降、世界では国家が急速に復権し、市民社会論自体が再び相対化される一方、実際の「内発的發展」には複数のリアリティが内在し、主体と構造という二元性と相互規定性が貫徹しているからである。

補章は、本書で提示された、主体としての知識人の形成についての解釈（主体形成論）と知識人を含む社会運動の諸アクターの行動の実証分析（権力関係論）という2つのアプローチについて敷衍したのち、社会構造と行為主体の関係、実証主義と解釈主義の関係を考察する。著者が力説するのは、いかなる手法をもってしても、主体と構造、解釈と実証の関係を厳密に「実証」することはできないが、理論家は理論だけでなく実社会における現象を、実務者はマクロあるいはメタ視点から自分の仕事が置かれている文脈性を絶えず確認し、異なる次元の議論に身を置く努力の必要性である。

### III

評者自身、本書から啓発を受けたことは多々あるが、とくに重要と思われる3点を指摘したい。

第1に、本書の考察対象となったオアハカの内発的發展は、大きな文脈で捉えると、ハーシュマンが提唱した「社会的エネルギーの保存と変異」の典型的諸事例として解釈することができる。すなわち、ハーシュマンは「欧米では、社会振興・社会福祉に向けた努力は、まずは『社会的良心』に目覚めた富裕層・中間階級が組織を立ち上げることから始まり、散発的に、限られた地域で行なわれた。こうした動きが先駆けとなり、最終的に政府自らが包括的かつ体系的な政策によって引き継いでいくことが多かつ

た」のに対し、ラテンアメリカでは、「金持ちと貧乏人とのあいだには深い亀裂があり、また強力な中産階級が存在しなかったこと、そのため長いあいだ、大衆の惨めな貧困が変更不可能な秩序の一部となってきたことが原因で」ローカルなレベルでさまざまなイデオロギーに鼓舞された実践的社会活動があり、これが先進国の良心的な組織・人々と結びつき、民間主導の社会活動が盛んになったと指摘している [ハーシュマン 2008, 154]。そして、この組み合わせだからこそ、ラテンアメリカにおける草の根運動はパターンリズムの要素が極力抑えられて分権化し、創意工夫に満ち溢れた多元的性格を有していると喝破している [ハーシュマン 2008, 154-155]。

第2に、本書のすぐれた点は、ハーシュマンと同様にメタ開発理論、思想、哲学をふまえたうえで、多岐・多数にわたる団体・個人をハーシュマン以上に長期かつ精緻に実証分析したことである。とくに、分析枠組みとして——異論はあるかもしれないが——内発的發展論とポスト開発論の言説的差異よりも実際の共通面に着目した点、協同組合思想が普遍性を持つのではないか、という今後の国民経済、世界経済を考えるうえでの重要な問題提起を行った点、そしてこのような協同組合思想の普遍性を示唆しながらも、社会運動家のようにこれを過度に強調するのではなく、批判的な研究者として研究対象との距離を保ち、社会運動におけるリアリティの複数性、主体と構造の二重拘束性に自覚的な点である。

第3に、「経験から思想へ」という「学び」を通じて、オアハカに組織化・対抗運動が生成し、「新しい公共空間」が出現しつつあることを理論的かつ実証的に——後述する課題はあるものの——示したことがあげられる。この「学び」は、レイヴ/ウエンガーのいう「状況に埋め込まれた学習」<sup>(註2)</sup>の一形態と理解でき、まさに学習とは「ひとりひとりの『こだわり』から出発しつつ、それが『みんな』との共有と公的承認のなかで、自分の役割がはっきりしてくるし、また、それがどんどん『十全なものに』展開していく。それによって共同体自体も『変容』し、再生産されていく」のである [レイヴ/ウエンガー 1993, 188]。

次に、残された課題も3点、指摘する。

1点目は、「地域性」と「普遍性」の問題である。著者の考察がオアハカ、しかもその一部の地域に限定されていることは重々承知しているが、本書の結論がどの程度まで一般化できるのかをあえて問いたい。大きな文脈でいえば、著者も述べているように、南部メキシコがグローバルもしくはリージョナルなレベルでの南北問題とナショナルなレベルでのそれという二重性を帯びているからであり、と同時に、評者は、著者が批判していると思われる「地域を地域研究者の独占物とするような地域研究」を乗り越えたいと強く思うからである。

評者のフィールドは、南部メキシコでもオアハカではなく、最貧困州といわれるチアパスである。そのチアパスでもさらに貧困度の高いチアパス高地を研究対象とする。同じチアパスでも地域による差は大きく、フィールドワークによる知見をどの程度まで一般化できるかについては、つねに禁欲的でなければならない。たとえば、本書で取り上げられたUCIRIについて評者もインタビュー調査をしたが、2005年の調査時点で55のコミュニティ、2800家族を擁する大組合が存在すること自体、そしてUCIRIがコミュニティ単位での加盟による連合という組織形態をとることも、チアパス高地では考えられない。政治的・宗教的対立が激しく、コミュニティ内でも紛争が絶えないからである。また、女性も含め、ほとんどの先住民がスペイン語話者であることも、チアパス高地との違いを認識せずにはいられない。したがって、「地域性」を認めつつ、そこに通底する何かを抽出するには、著者が本書で洞察したように、メタ概念あるいは実践面での共通点が重要で、文化資本・ハビトゥス(ブルデュー)、社会関係資本(パットナム)、ローカル・コモンズ(井上真)、あるいはこれらの複合的な概念が鍵となるかもしれない。

2点目は、分析の方法である。著者の問題意識は、オアハカの内発的発展を「運動」として捉え、その活動の実体と、その背後にある媒介者としての知識人の役割とを「接合」することであり、それには「成功」していると評者も考える。しかしながら、内発的発展を推進するNGOなどのアクターは、フェア

トレードに典型的にみられるように、運動体であると同時に事業体でもある。事業としての可能性と課題も追求しなければ、事例そして内発的発展の総合的評価・分析につながらないのでは、という大きな疑問がわく。もっとも、著者自身、「あとがき」で「政策研究を念頭に置いていた最初期の論文と明確に社会運動や解釈研究を意識した最近の論文とのあいだにみられるギャップを埋めることはできなかった。また、UCIRIやUCIZONIの活動の詳細に関する現地調査と文献収集を行ない、その分析結果を本書に含める予定であったが、研究費面での制約、(中略)などにより、作業半ばで断念せざるを得なかった」(340ページ)と述懐しているように、その課題については自覚的である。

最後に、分析の射程という大きな問題がある。著者自身、第7章で「本章の検討の目線はマクロの国家・州レベルとミクロのコミュニティ・レベルの中間のメソ・リージョナルレベルのそれであった。コミュニティ内部での意思決定やそれにかかわるポリティックス、コミュニティの内部者からの『ものみえ方』という検討課題は扱っていない。仮に各事例の活動が展開される地域において、文化人類学、民俗学的な研究が行なわれれば、本章のそれとは全く異なった問題提起がなされ得ることは十分に想定できる。しかし、本章でみてきたことは、今日のオアハカにおける対抗運動形成のメカニズムのサンプル事例であり、諸相なのである」(240ページ)と断っているが、コミュニティ内部のポリティックスを分析しなければ、対抗運動形成のメカニズムを十全に解明したことになるのではないのか。別言すれば、内発的発展論が重視するキーパーソンが地域発展や社会運動の触媒にすぎないとすれば、また、先住民族と現地市民社会のネットワーク化を共同体的市民社会として論ずるのであれば、共同体およびその構成員(市民というよりも先住民と呼ばれる人々)に関する調査が必要不可欠であろう。「新しい」公共空間とは、ハーバーマスが論じた「市民的」公共性のみならず、サパティスタが提起しているように、先住民をも含む、より広範かつ重層的な空間が想定されているからである<sup>(註3)</sup>。

以上のように、本書は、開発理論、思想、哲学というメタレベルと内発的發展支援団体・支援者というメソレベルを扱ったオリジナリティの高い成果であるが、コミュニティというミクロな世界の社会的エネルギーの保存と変異については未解明である。その意味で、本書は「未完のプロジェクト」であり、「非」地域研究者である著者から（評者を含む）南部メキシコ地域研究者への挑戦もしくは共同研究への誘いといえよう。

（注1） そのプロセスと理論的批判は、佐野(2009)に詳しい。

（注2） 学習とは、人々と共同で社会の中で何かを作り出すという実践の中で行うものであるから、学習だけを社会的実践の文脈から切り離すことはできず、社会やコミュニティという文脈・状況の中で何かをする時に「学び」が生まれる、とする学習観である [レイヴ/ウェンガー 1993, 186-187参照]

（注3） サパティスタの公共性については、山本(2002)を参照。

#### 文献リスト

内橋克人 1998.『日本改革論の虚実』岩波書店。  
 ザックス、ヴォルフガング編 1996.『脱「開発」の時代——現代社会を解説するキーワード辞典——』（三浦清隆ほか訳）晶文社。  
 佐野誠 2009.『「もうひとつの失われた10年」を超えて——原点としてのラテン・アメリカ——』新評論。  
 ハーシュマン、アルバート・O. 2008.『連帯経済の可

能性——ラテンアメリカにおける草の根の経験——』（矢野修一・宮田剛志・武井泉訳）法政大学出版局。

ベンホルト＝トムゼン、ヴェロニカ編 1996.『女の町フチタン——メキシコの母系制社会——』（加藤耀子ほか訳）藤原書店。

本山美彦・萱野稔人 2008.『金融危機の資本論——グローバルバリエーション以降、世界はどうなるのか——』青土社。

山本純一 2002.『インターネットを武器にしたくゲリラ——反グローバルイズムとしてのサパティスタ運動——』慶應義塾大学出版会。

—— 2005.「連帯経済の構築と共同体の構造転換」内橋克人・佐野誠編『ラテンアメリカは警告する——「構造改革」日本の未来——』新評論。

—— 2006.「コーヒーのフェアトレードの可能性と課題」野村亨・山本純一編『グローバル・ナショナル・ローカルの現在』慶應義塾大学出版会。

レイヴ、ジーン/エティエンヌ・ウェンガー 1993.『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加——』（佐伯胖訳）産業図書。

【付記】 本書評を執筆するにあたり、著者である北野収氏に直接会って評者の質問にご回答いただいたうえ、草稿に対する有益なコメントも頂戴した。記して感謝する次第である。ただし、本稿は評者の見解であり、誤りがあるとすれば評者一人の責任である。

（慶應義塾大学環境情報学部教授）